

# 書に生きる 浅海蘇山

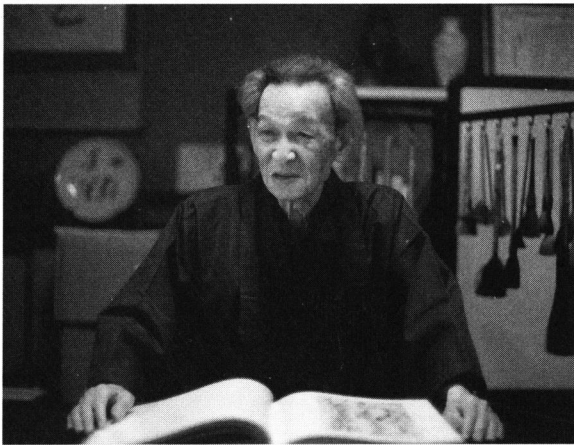
## 蘇山先生の書 (六)

### 一 まえがき

「蘇山先生の書」(四)を本紀要第二十九卷第一号(一九九六年九月)に発表して三年余、また(五)を「愛媛国文と教育」第二十一号(一九九八年七月)に発表して一年余経過した。師浅海蘇山(注)の書については、少しずつ発表して、いずれはまとまったものにならねばと念じつつ、雑用に追われ、また本年(一九九九年)は八月に中国上海で、九月には中国曲阜で私の書の個展を開催するというようなこともあり、執筆の機を逸してしまった。

せめて年に一回は何かに発表したいと思いつつながら私の怠惰の性で今日に至った。

前回にも記したが、師蘇山に対する思慕の情は薄れるどころかますます強まり、師を失ったもどかしさを日々痛切に感じているのが現在の心境である。さりとて蘇山師以外に師を求める器用さもないし、師の死去は自立せよとの無言の教えと自覚して今日に至っている。



浅海蘇山 (1992) 80歳

菊 川 國 夫

(書道研究室)

本稿は、一九九一年七月、浅海蘇山の傘寿を記念して発刊された作品集「書に生きる浅海蘇山」の監修責任者となり、作品の選定、編集にいささかの労を提供したので、蘇山作品の私なりの思いを述べておきたいと考えたからである。

その他本稿執筆についての所感は、過去発表した五編、特に前稿の(四)を参照していただきたい。

## 二 伐柯

「伐柯」は私の記録によると、一九八〇年（昭和五十五年）第六回法天書展に出品された作品である。後にこの作品は愛媛県に寄贈され、現在は愛媛県議会議事堂に掲額されているという。（図1）がそれである。作品集編集に当たっては私の作品を入れることを強く要望し、カメラマンの渡辺隆志氏にお願いした。渡辺氏はスタジオ撮影を希望され、

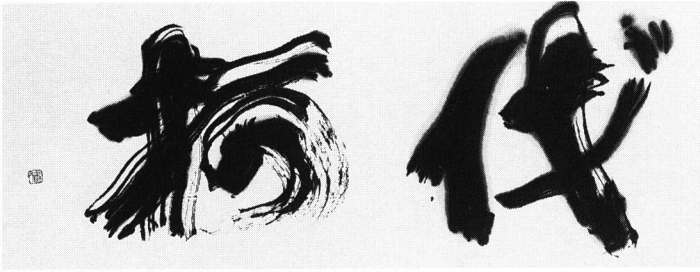


図1 「伐柯」1990 52×140

県の方と交渉したが私達の願いは適えられなかった。諦めかけていた所、蘇山夫人よりその時書いたものがいつくかあり、しかも落款の印も押してあるものがあるというので作品集に入れたのが本作（図2）である。蘇山自身が最終決定し法天書展に出品したものは趣向が少し異なるが、迫力のある作品で大いに満足したことを今も実感している。

「伐柯」とは「詩経」の「国風・豳風（ひんぷう）」にある詩「伐柯」に由る。「新釈漢文大系 詩経」より引用する。

伐柯

伐柯如何 匪斧不克

取妻如何 匪媒不得

伐柯伐柯 其則不遠

我觀之子 籩豆有踐

柯を伐るには如何にせん 斧に匪ざれば克はず  
妻を取るには如何にせん 媒に匪ざれば得ず

柯を伐らん柯を伐らん 其れ則ち遠からざるを  
我れ之の子に觀はば 籩豆 踐たり

通釈

木の枝伐るにはどうする、斧でなければ伐れはせぬ。妻を娶るにはどうする、仲人なくてはもらわれぬ。

木の枝伐るには、手元の枝から。この子と会うたその時は、ずらりと並ぶ籩と豆。

籩は竹で編んだたかつきで、果実や干した肉等を盛る器、豆は木製のたかつきで漬けた野菜や塩漬けの肉を盛る器のこと、ここではいずれも婚礼に用いる器をさす。

ところでこの伐柯の寓意はなにか。

「角川漢和中辞典」にいう。

「斧の柄にする木を切る意。その太さ長さは手近な斧の柄を手本として切ればよいので、人の手本は眼前にあり、遠く捜す必要はないこと」

吉川幸次郎著「日本詩人選集 第2巻

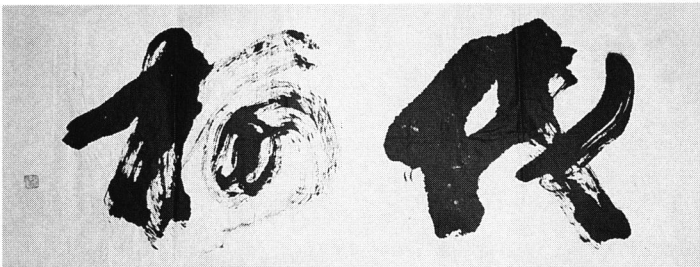


図2 「伐柯」1980 52×139

詩経国風「下」では次のように述べられている。

「この章の前半は、人間の法則は人間の現実生活そのものの中から発見されるたとえとして、『中庸』にも引かれ、大変有名である。毛伝が『其のめ上に願う所を以つてめ下に交わり、其のめ下に願う所を以つてめ上に事う。遠くに求めず。』というのも、似た意味であるが、後半との連なり方は、至つて明かでない。」とある。

蘇山の書を見るに、一九七八年からそれまでの一字書に代つて急激に二字の少字数書が増えてくる。

一九七八年「澄心」(独立展)「不撓」(独立会員書展)「甚深」(毎日展)

一九七九年「調心」(独立展)「大中」(独立会員書展)「晏如」(独立愛媛支部展)「一念」(毎日展)

一九八〇年「揮斥」(独立展)「両忘」(独立会員書展)「洞然」(独立愛媛支部展)「伐柯」(法天書展)「洞玄」(毎日展)

一九八一年「迪哲」(独立展)「長風」(独立会員書展)「此間」(法天書展)「耕心」(毎日展)「無門」(執中)「真如」(貞休)「愛語」(郁穆)「中過」(幽寂)「閑寂」(平安)「處順」(三楽)「得花」(清閑)「迪哲」(以上古稀記念展)

一九八二年「一向」(独立展)「開花」(独立会員書展)

一九八三年「回心」(独立展)「愛語」(独立会員書展)

これが一九八四年以降には二字書に代つて再び一字書が多くなってくる。

古稀記念展が二字書のピークといえようか。この二字書を多く書いた時期には傑作が多い。「長風」は、一九八二年中国で毎日書道展が開催した「北京現代日本書道展」に出品され、中国でも人気を博したものである。

「一向」は第四稿でも述べたが、墨色が話題になった作である。

蘇山の二字書は蘇山の書の理念が凝縮した作品である。ここで蘇山の二字書について考えてみよう。

まず第一にわかりやすい。蘇山は「蘇山ノート」四で「読める字」と題して次のように述べている。

「私は文字を書くことをモットーとしている。正しい文字は当然美しいのだから、自分が満足し、相手にも喜んでもらえるのだと信じている。

書を志す人は用筆、造形、リズムの原理を会得して、書的美を自在に發揮すべきであるが、伝統芸術としての見識と誇りを持ちたいものだ。

中国の大詩人が、『詩は眼前の景を日常の言葉で述べたものが一番よい』と言っている。勿論、感動の無い処に詩は生まれない。

米山の日記や書作品は彼が先賢の名跡を学ぶに従つて次第に格調が高まり、感動の持続が八十六歳の最後の日記も、八十八歳の書もますます新鮮さと正確さを増して老衰を感じなかった。

書は正しさを第一にして、古を師として学び、常に自分の知性と感性を磨いて、題材の選定、形態の美を追求して、生命のリズムを高らかに歌い上げたいものだ。

同じ書は二つない宿命を持っている。一時一事に集中できたらよい。一番分かり易い字を美しく、楽しく書けるように努力しようではないか。」

第二に蘇山の書は品格がある。わかり易いが俗臭を感じない。蘇山は分かり易い字を主張したが、俗臭を嫌った。

同じく「蘇山ノート」四の中に「脱俗」と題する一文がありこれも参考として引用しておこう。

「人間の修養を説いた『菜根譚』の中の一章を、もう一度紹介して、

共に反省したい。

『能脱俗、便是奇、作意尚奇者、不為奇而為異。不合汚便是清、絶俗求清者、不為清而為激。』

よく俗を脱する者は奇人である。ことさらに奇人になろうと心を使う者は奇人にならずに、変人になる。

きたないものといっしょにならぬのが清いので、俗からはなれて清い人になろうとする者は、清くならないで激烈な人になる。(奇人とは、すぐれた人のこと)

これは人間一般の生き方に対する尊い教えであるが、書を学ぶ私達は、書表現の上でこの教えを受けとめたい。

『俗』という言葉はよく使われ、好ましく思われぬのだが、私たちは、なれて、ぼんやりと気付かなく使っていることが多い。

良寛が、料理屋の料理、書家の書を嫌いだと言ったという真意も、大切な批判として受け取りたい。——中略——

書は教養であり、道であるから、俗であってはならぬものであり、たとえ汚濁の社会に生きてても、自分の人格を磨き、仲間と修業し合って、清く美しく安らかな世界を建設する正確な判断力ある智慧と、すべてを尊ぶ愛情を深めるために俗を脱したいものだ。」

第三に蘇山の書はバランスがよい。特に横二字三字四字の作にその力量ある所を示した。横作品は意外とバランスが難しい。二つの「伐柯」は同時期に制作されたものだが潤渴の変化は微妙に異っている。

法天展の作(図1)は左右の白にゆとりがあつて、蘇山作としては紙の大きさ(連落ち52×140)に比して字形も線もボリュームがあるのだけなど、よく開いた線がさわやかである。

さまざまな角度の線が入り交じってそれでいて表現は簡潔である。この作はポスターにも使用され、古稀記念展にも出品された。

### 三 松下問童子……

この作は一九六五年(昭和四十年)第一回個展に出品されたものである。(図3)

胃潰瘍手術後、六か月経ない健康状態で、肉体的条件が十分でない時の個展だったと、「蘇山ノート」(註)で述懐している。しかし、「精神的には決して意気消沈していなかったつもりです。」と初の個展に対して、自己を鼓舞し、健康面での再起を書を通して見せてやろうという意気込みもあつたのである。

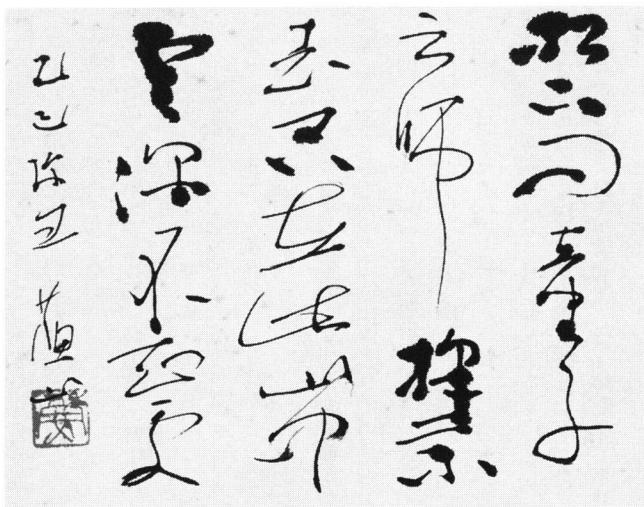


図3 「松下問童子」1965 13.0×17.0

「今の私はしなげればならぬ仕事があり、それとあります。それぞれの仕事に愛着を持っていて、なおさら張り切っています。作品発表については体調を整えてからと思っていました。が、多勢の人々の勧めや協力をいただいで、ありがたいことだと感謝しながら作品制作に没頭しています。病後の現状を見て

「ただけららと思っています。」と目録のあいさつで述べている。

蘇山五十四歳の時である。

会場 松山市大街道プランタン画廊

とき 昭和四十年四月九日～四月十五日

その時の出品目録を次に示す。蘇山の作品の傾向、当時の蘇山の考え方も概略わかると思う。作品集は出さなかったが、全作品のプロマイドを作製し、門下や希望者に頒布したものが筆者の手に残っている。

### 第一回書作展目録

- |    |       |    |            |
|----|-------|----|------------|
| 1  | 叶     | 14 | 芬          |
| 2  | 喜     | 15 | いろは歌       |
| 3  | 鳥歌花舞  | 16 | 鈍鳥逆風(楷)    |
| 4  | 守中    | 17 | 鈍鳥逆風(篆)    |
| 5  | 柳絮随風  | 18 | 蘭在幽林       |
| 6  | 松下問童子 | 19 | 松下問童子      |
| 7  | 韶     | 20 | 清尚         |
| 8  | 問有趣   | 21 | 嘯月         |
| 9  | 淵     | 22 | 心澄めば(山頭火句) |
| 10 | 巡     | 23 | 幽雅         |
| 11 | 盤     | 24 | 初心不可忘      |
| 12 | 慧     | 25 | 心澄めば(短冊)   |
| 13 | 梅     |    |            |

この個展に師の手島右卿(号)は一文を寄せた。

「浅海蘇山君は現在最も今日の新たな新書芸活動を展開している独立書道会の幹部であり、愛媛書芸文化協会を率いている第一線書人である。今回の個展は、はじめての催しだと聞かすが、比較的軽快なタッチに新感覚と、多面的なスタイルを覗かせていて、病後の健在を示して余りある。

君は時代の先端をきりつつも、常に本道に立つことを忘れず、その表現は知性的でしかもつましく、過剰の書き込みや、奇矯に陥ることなく、概して簡逸、淡雅の表現であり、時に蕭散の趣もあって、日本的ムードの饒ゆたかなところに特性がある。作家であると同時に愛媛大学に職を奉ずる学究人でもあることも推敲と整理からくる潔淨感を通して窺うことができる。」

この一文は先生の当時の書境を述べて、簡にして要を得た名文だと感じいった記憶がある。作品解説にも十分なっている。

また蘇山の師範学校在学時の附属学校の指導教官で、主幹誌「書芸」の顧問役でもあった俳人村上壺天子(号)からも次のような文が寄せられた。長文であるが以下に示す。

### 濃墨に見られぬ美しさ

村上 壺天子

蘇山氏の作品は一言につくせば、きわめて芸術的香気の高いものであり、人格的な幽玄を背後に浮動させている。今回はおおむね小品であるが、大作をきそう展覧会などで見受けがちな邪心が少しも見られない。作品はほとんど淡墨で書かれ、黒では見られぬ美しさが私を楽しませてくれた。

もちろんそれは淡墨一般から受ける感じであるが、なかんずく淡墨なればこそとうなずかれるにじみのおもしろさや、筆勢途上で特別な技巧を加えたかとも見られる自然にあらわれた濃墨のタッチなどは、絵画的表現をさえ思わしめる。ともに表現過程の偶然的所産であろうが、それは単なる偶然ではない。多年の精進から生れ出た必然的偶然である。芸術的だご味は、かかる偶然が顔を見せた時つともゆたかなものとな

る。

象形的な方面では、一字の構成、文字の配列、文字の感得などから受けた作者の感動が、そのまま形や筆意にあらわされ、その心のたかぶりが、ほのかなリズムをもって個々の作品に浮動していて、観者の心をゆさぶる。しだいに鑑賞を進めているうちに、私の心は以上述べたような部分的観点から離れて、静かに会場のふんいきの中にひたっていた。そして書は人なりの言葉が新しく心頭によみがえってきた。

蘇山氏は繊細な感性の人である。それでいて小事にこだわらぬ恬淡、清潔、内向的な性格の持ち主である。その風格がまことに高貴な姿で作品のどれにもにじみ出ている。

今回の書展を見た感想として特筆すべきものと思う。

蘇山氏はまた書画における正統派の人である。「古典を踏みしめて、個性的向上を旨として進みたい」とも、『書芸も芭蕉の俳諧における不易流行と相通するものがある』ともいつておられる。同氏の作品は、胸中常に古人あり、落筆一刻も古人無し、の信念と境地から生れたものであろう。古典を背景として個性の花が咲き盛っている趣を呈しているこの個展に、私は絶大の好感を持つことができた。

「松下問童子」と題する作は唐の詩人賈島の「尋隱者不遇」という題の詩である。

蘇山はこの個展に同じ詩をもう一点書いて出品した。(図4)

作品集「書に生きる 浅海蘇山」に出した方は、手島右卿のいう「軽快なタッチ新感覚」を覗かせている作である。(図3)

図4の方は村上壺展子のいう「濃墨に見られぬ美しさ」を持った「絵画的表現をさえ思わしめる」作の一つである。

図3の細線を厳しく利かせた作品はこの時期の蘇山の作品一つの特徴

である。極細の長鋒を用い、かなりなスピードで書いていた。落款に珍しく「己巳弥生」と書写年月を干支で入れているが、作品全体とよく調和し、一紙を引き締めている。

図4の方は淡墨の作品で一行と四行の頭部に墨継ぎがあつて、潤

渴の変化の難しい仕事をしているが、逆に中二行の余白の部分を引き立てている。筆もこちらの方は少し大きめで、淡墨の溜りが、水墨画のたらし込みのような墨色の変化をかもし出しているが、仕事は絵と違って、一発真剣勝負の厳しさの世界を感じる。

蘇山第一回展は小品ながら、従来の蘇山の作に見られない大胆な作もあつて、門下の私達も作風の幅広さに驚いたものである。プロマイドより二・三紹介する。

「磐」(図5) この当時蘇山はあまり青墨を使わず、褐墨(かつぼく)と称して、茶墨系の墨を使っていた。

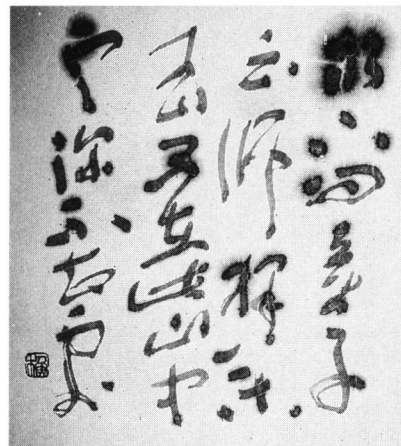


図4 松下問童子 1965



図5 磐 1965

この作もその一つで、この大胆な発想は私達を驚かせた。太線ながら、表現は簡潔で無駄なもの一つもない。滲まない紙を使ったため墨量は多いが、白がうまく残って効果的である。この他に同傾向の墨色のもの「巡」があるが、これは別の機会に述べる。

「芬」(図6)これは滲む紙に青墨をや、濃い目に調合したものである。一本の横画を軸にして、六つの点で構成されている。下部中央の三つの点が見えない縦軸でつながっており、最後を印で引き締めている。この印は

右側の点とうまく対応させている。なお印はこの当時鴻池楽斎(注1)より提供された陶印の一つで蘇山愛用のものである。

「慧」(図7)こ

れは蘇山愛用の古唐墨を用いたものであろう。終戦直後に明墨のよいもの入手し、その古雅な色を發揮させて、名作を多く書いている。この題材は気に入っていたらしくその後い



図6 芬 1965



図7 慧 1965

くつか作品を発表しているが、造形については行書のこのスタイルを変えることはなかった。潤濁の妙と自在な動きと沈潜した線で落ち着きのある作になっている。

#### 四 あとがき

本稿は「愛媛国文と教育」に(一)(二)(三)(四)(五)を発表し、本紀要四に発表したものの続編である。

まえがきにも述べたように年に二回位の意気込みはあったが、性来の怠惰な性格はその機会を失している。

退官までの一年有半の間にまとまればと念じているがどうなることか。

蘇山の偉大さを実感しているばかりである。(文中敬称略)

#### 注

(注1) 浅海蘇山(明治四十四年)一九二一(平成四年)一九九二(愛媛師範学校(現愛媛大学教育学部)卒業、小学校教諭を経て、愛媛師範学校教諭、愛媛大学教授、独立書人団会員・総務理事、愛媛書芸文化協会主幹、法天会会長を歴任。

(注2) 愛媛新聞社「書に生きる浅海蘇山」(一九九一・七) 菊川國夫他監修、蘇山最後の作品集。

(注3) 図2(伐柯)

浅海蘇山古稀記念実行委員会「蘇山作品集」(一九八一・三)による。

(注4) 「新釈漢文大系 詩経 中」(明治書院一九九八・一二) 石川忠久

(注5) 「角川漢和辞典」(角川書店一九五九・四 初版、貝塚茂樹他編)

(注6) 「中国詩人選集 第2巻 詩經國風下」(岩波書店一九五八・一二) 吉川幸次郎

(注7) 「蘇山ノート」 浅海蘇山が主宰した書道誌「書芸」やその他新聞雑誌等に寄稿した文を集録したもので、自費出版の形で四回出版された。(一) 一九七二、(二) 一九七六、(三) 一九八二、(四) 一九八八

(注8) 「蘇山ノート」(一)より。以下の引用も同書から。

(注9) 手島右卿(明治三十四) 一九〇一(昭和六十二年) 一九八七) 書家、高知県生まれ、川谷尚亭、比田井天来に師事、独立書人団を創設し戦後少字数の書を開拓、書の象徴性を追求した表現様式は現代の書壇に大きい影響を与えた。文化功勞者。

(注10) 村上壺天子(明治二十年) 一八八七(昭和五十九年) 一九八四) 教育者・俳人、愛媛県越智郡生まれ。愛媛師範学校(現愛媛大学教育学部)卒業、小学校教員として愛媛県教育界に指導的役割を果す。師範時代から俳句を村上霽月に学び、のち松根東洋城に師事「洪柿」同人、句集、句碑も多い。

(注11) 鴻池楽斎(大正四年) 一九一五) 書家、独立書人団参与、戦後浅海蘇山らと書道誌「書芸」を発刊、愛媛県書道界のリーダーとし活躍、かたわら米山、山頭火、下村為山の研究をし著書も多い。

(一九九九年十月十二日受理)